

被災地派遣レポート＜第87回＞

財務局建築保全部施設整備第一課 伊辺 岳さん

私が宮城県に派遣になったのは、震災から1年が経過した平成24年4月から9月末までであった。出発した東京は、少し早めの桜が咲くほど暖かった。家財道具を詰め込み、白河を越える頃には小雪が舞い始め、これからの半年間しっかり任務が遂行出来るか心細く不安になったのを覚えている。

第一陣が派遣（平成23年6月～平成24年3月末）されていた後任として派遣された。配属先は、宮城県土木部設備課で、宮城県職員12名（管理職2名、電気職5名、機械職5名）、派遣職員は5名（秋田県2名、熊本県1名、兵庫県1名、東京都1名）で構成され、派遣職員は、営繕課施設保全班に集約され「営繕課分室・設備課分室」として、建築職9名と共に災害復旧業務を行った。

第一陣は、災害状況の把握、補助金申請、工事設計・発注業務が主な任務であった。第二陣は、工事監督が主な業務の“予定”であった。よって、派遣職員は半減され業務量も半減する“予定”であった。

担当する案件は、県立学校、博物館、警察署、港湾倉庫とさまざまで、消防署以外の被害のあった県有施設であった。津波被害の他、内陸部においても地震被害が大きく（あまり報道されていないが）、復旧工事の内容も多岐に亘った。北は三陸の気仙沼から南は岩沼まで、担当する案件は50件を超えた。

日常業務は、庁有車で建築職、電気職、機械職と班を組み各現場に行き、監督業務を行った。派遣職員同士では地理、地名に不慣れであったため、現地に到着するまで大変苦労した。

県庁に帰庁するたび、その日契約予定の震災復興工事が次々と入札不調となっていた。入札不調の原因は、資材不足及び資材高騰、労働者不足が主な理由であった。多いときで発注の半分が入札不調、さらに案件によっては、入札不調も2度、3度と続き「スピード感」といった言葉に正直どこか虚しさを感じた。

以降、深夜まで単価を入替え、図面を書き直す作業が夏以降も続いた。よって“予定”であった監督業務は昼業務、発注業務が加わり夜業務となった。

被災地復興においては、予定は未定であり、日々変化する社会情勢、被災地からの要望等に柔軟に対応すること、そして業務を少しでも前に進ませることが最も重要であった。これら遂行にあたり、宮城県職員はじめ、派遣職員と共に知恵を出し、協力し合い業務遂

行が出来たことは大きな財産である。

そんな中、唯一の楽しみは昼食であった。仙台市内では、牛タンはあまりに有名だが、冷やし中華発祥の地と言われており年中どこでも食すことができた。海岸沿いの現場では、復興市場で海鮮丼を、内陸部では蕎麦を、と言った具合に「県食材を食べて復興」と心に決めて食した。とりわけ海鮮丼は、旬の魚が盛られ、東京では食べることができない味を堪能できた。



震災から1年が経過した被災地では、がれきは片付けられ雑草が生えた状態で、一見すると元々雑草の平野だったかのような風景であった。その横を大型ダンプが埃を巻きたて忙しなく行き来していた。震災から2年が経過し、より確実に復興が進んでいると思う。父親が宮城県出身であったこともあり、幼い頃おぼろげながら記憶している美しい海岸線はもうそこにはなかったが、トンビがゆったりと旋回している風景だけは変わらなかった。一日も早く、あの美しい風景を取り戻すために、東京に戻っても出来る支援を続けていきたいと思っている。

おわりに、震災で亡くなられた方々にお悔やみ申し上げますと共に、今なお避難先でご苦労されている皆さんにお見舞い申し上げます。

